



人的資本の幅とキャリアの成功

かとう
加藤

たかお
隆夫

●コルゲート大学経済学部W. S. Schupf Professor
コペンハーゲンビジネススクールVelux Visiting Professor

今年の夏もデンマークに3ヶ月ほど滞在した。首都コペンハーゲンにあるCBS (Copenhagen Business School) にVelux Visiting Professorとして、研究漬けの贅沢な日々を送ることができた。何世紀も栄え続けた美しい旧市街の一角に、大学が高級アパートを客員教授用に用意している。幸いなことに、そのひとつが私にあてがわれた。もちろん、交通手段は自転車である。私が十年以上ほぼ毎年客員教授を勤めたオフス大学のあるオフス市もそうであったように、コペンハーゲンの通りは、明確に3つのレーンに分かれている。自動車用と歩行者用に加え、自転車用のレーンが自動車用レーンより一段高く作られ、それが町中に整備され、私のような自転車愛好家には天国のようなところである。大学が所有する自転車を借り、毎日の通勤はもとより、買い物、友人宅への訪問、レストラン等々、すべて自転車で済ませた。郊外に行く際にも、電車には自転車用の車両があり、そこに自転車持参で乗り込んだ。自転車を持ちこんでも電車賃は変わらない。遠距離の列車でもわずかな追加料金を払えば、自転車持込可である。デンマークは、なぜそれほど自転車の利用者に手厚いのであろうか。それを知るひとつの鍵は、自動車税であろう。デンマークで自家用車を購入する際にかかる自動車税は、180%である。これは、誤植ではない。デンマークで自家用車を1台

購入すると、価格は、ほぼ3倍になる仕組みである(今年度は、150%に減税された)。デンマークは、自家用車の利用と自転車の利用の相対価格を政府介入によって極度に自転車に有利にしている。と同時に自転車の利用の効用を高めるための目覚ましいインフラ整備に努めてきた。自家用車の代替としての自転車の活用は、近距離の交通手段としては、理にかなっていると思われる。環境へのプラス効果は、言うまでもないだろう。さらに、個人的な例で恐縮だが、絵に書いたような車社会である拙宅のあるニューヨーク州北部を離れ、デンマークに2~3ヶ月滞在するたびに、私は体重が5キロほど減り、すこぶる健康になる。自転車の利用は、個々人の健康増進・生産性上昇を促し、ひいては国全体の医療費の節約・経済力の向上をも引き出すだろう。アメリカの次期大統領のトランプ氏は、特大のインフラ投資を進めると公約している。それに大規模な自転車用レーンの建設が含まれることを切に願っている。さらに日本でも、近年ようやくマスコミでも取り上げられるようになった自転車事故を防ぐ一助としても、大規模な自転車用レーンの建設を真剣に考えてみてはどうだろうか。

さて、自転車愛好家としてのバイアスのかかった政策提言はこのくらいにして、コペンハー

ゲン滞在の研究成果を紹介したい。今日は、デンマークでの私の若き共同研究者の一人、Anders Frederiksen との共同研究の成果、Human Capital and Career Success : Evidence from Linked Employer-Employee Data に焦点を絞る（論文は、ちょうど今 Economic Journal に条件付で受け入れられたばかりであり、最終草稿は、<https://sites.google.com/a/colgate.edu/takao-kato/FrederiksenandKato21feb2014.pdf?attredirects=0&d=1> からダウンロード可）。経営のトップの座につく確率（キャリアの成功確率）は、過去様々な職種を経験して獲得した人的資本の幅が広がれば広がるほど高まるという仮説を支持する統計的にも経済的にも有意な証拠を、私たちは発見した。以前紹介したデンマーク一国の労働者をすべて網羅し、しかもその一人ひとりについての過去の全職歴を企業情報とマッチングさせた LINKED EMPLOYER-EMPLOYEE DATA (LEED) を使った。得られた証拠の頑強性 (robustness) も、追加の分析で確かめられた。たとえば、個々の先天的な能力を正確に測る尺度が存在しないため、観測されたキャリアの成功確率と人的資本の幅との有意な関係は、因果関係というよりも、むしろ測れない先天的な能力が原因となって生み出される単なる相関関係かもしれない。つまり、測れない先天的な能力が、キャリアの成功確率を上げていると同時に人的資本の幅も増加させているのかも知れない。キャリアの成功の原因は、測れない先天的な能力であり、人的資本の幅ではないという可能性が除去できない。そこで、私たちは、LEEDを駆使して、ミンサー型の賃金関数をデンマークのすべての労働者についてひとりひとりの固定効果を右辺に含んで推計し、その結果得られた個々人の推計された固定効果を使って先天的な能力の代理変数を構築した。幸い、その先天的な能力の代理変数をコントロール変数として右辺に追加しても、キャリアの成功確率と人的資本の幅の有意な関係は、崩れなかった。

さらに、私たちは、同一企業内で様々な職種を経験して人的資本の幅を広げた場合と、他社で同様に様々な職種を経験して人的資本の幅を広げた場合を比較した。経験した職種の数は同じでも、企業内で培った人的資本の幅のほうが、キャリアの成功には、はるかに効果的であることが確認された。それは、企業特殊的人的資本の重要性を示唆する証拠になろう。人的資本の幅と学歴との関係は補完的であることも発見した。つまり高学歴者は、人的資本の幅をより効果的に活用できるということであろう。最後に、女性のキャリアの成功確率は、測定できる様々な属性をコントロールしても確かに男性の成功確率を大きく下回ることが確認された。女性が直面するガラスの天井は、デンマークでもいまだに崩壊していないようである。ただし、大学院を修了することのキャリアの成功への効果は、女性のほうが男性よりも有意に大きいことが見出された。それは、昇進競争でのハンディを、女性は学歴を積むことでかなり克服できることを示唆している。

これまで、人的資本は、やや一元的に教育年数や経験年数で測られ、その幅がキャリアの成功にどの程度貢献するかを確かめる丁寧な計量分析はなかった。今回の研究は、人的資本の幅の重要性を検証する実証分析の第一歩となったのではないかと自負している。人的資本の幅に注目する研究がこれから多くの研究者によって、様々な国で進められていくと期待している。人的資本の幅の重要性には、すでに小池和男、Edward Lazear、Bob Gibbons、Mike Waldman の画期的な研究のおかげで、理論的な裏づけが得られている。さらに、人的資本の幅に注目することで、企業特殊的人的資本論の再構築、女性やマイノリティに対するガラスの天井の原因、過度な長時間労働が必要悪になるラットレース昇進競争の根拠等、職場を取り巻く様々な問題に新たな視点、洞察が生まれるであろう。今後もますます人的資本の幅に関する研究を進めていく所存である。